「こどもまんなか」を問う①

この国はこどもを守る意志を本当に持っているのだろうか？こどもを守る強固とした意志を感じることができない。

こどもを傷つける社会であってはいけないと思う。現在は誰がいじめ被害に遭っても不思議でない時代であり、その時本当に守れるのか? 誰が学校に行けなくなっても不思議でない時代であり、その時本当に守れるのか？

それが担保されていないところでこどもと過ごすことに不安を感じるのは当然である。

今までは「学校に行っていれば安心だ」だったが、そういう時代はもうとっくに終わっている。

どうしてこれほどまでに、こどもを守ろうとする社会にできなかったのだろうか？

こども若者たちの自殺が増えている。中学校卒業後の非就学非就業のこども若者たちが増えている。学校や社会を拒絶するこども若者たちが増えている。

この状況は異常と感じざるを得ないのだが、こどもを守ろうと立ち上がってこなかったことが一層異常に思えて仕方がない。

「こどもまんなか」を問う②

昨年 11 月に亡くなられた谷川俊太郎さんの「こどもたちの遺言」を読み返している。

その中で、谷川さんは、『生まれたよ　ぼく』では「ここがどんなにすばらしいところか　邪魔しないでください。」、『いや』では「いやだ と言っていいですか。」とうたっている。

こどもの意見表明について、こどもに対する尊厳について問いかけている。まさにこどもアドボケイトを体現していると思えてならない。

谷川さんは、こどもたちはある意味大人より鋭く、豊かであり、一人の他者として子どもを認めてきたのではないか、自分の中にある子どもを出すことによって子どもとのつながりを持とうと考えてきたのではないか、と思う。

こどもにこそ人間の本質がひめられているのであり、こどもたちが既成の学校に魅力を感じなくなっているのは、自分たちのこども性が尊重されず壊されていくことに気づいてきたからではないかと考える。

「こどもまんなか」を問う③

「姿を隠していく若者たち」

私は学校に行けないこどもたちやひきこもっている若者たち、いわゆる制度の狭間にいらっしゃる方々への支援活動を続けている中で、最近とても心配なことがあります。

それは、中学校卒業後あるいは高等学校中退後にどこにもつながっていない若者たちが増えていることです。

彼らは進学したり、就業したいのであるが、そこにはさまざまな壁があり、あきらめてしまうしかない状況になっているのです。

良かれと築き上げられてきた社会ではあるが、それはどこまでも不完全な社会であり、生きづらさを抱える人たちがいらっしゃることを忘れてはならないと思います。

彼らが夢や希望を持ち続けるためには、私たちにできることは何なのかを自問する日々です。

社会の生きづらさに一番直面しているのは彼らですが、今までは彼ら当事者抜きで討議し制度を作ってきたんだと思います。

今こそ彼らが思いを直接発信する場を保証することが最も求められているのではないでしょうか。

「こどもまんなか」を問う④

高等学校再編に一言

高等学校再編についての議論が続いている。

行政の考え方、地元の考え方が交錯している。富山県の将来に影響を与える重要な施策である。

今の議論に当事者たちの意見が反映されているのだろうか。当事者とは、県内在住で広域通信制高等学校に通っている生徒たちのことだ。

現在、在籍は他県になるが、相当数の県内の高校生が広域通信制高等学校に所属して通っている。彼らが県内の高等学校を選ばないで、広域通信制高等学校を選ぶようになった背景こそが、今の高等学校再編の鍵になると考える。

また、それは小中学校での教育の在り方にも及ぶテーマとなるだろう。

要するに、高等学校再編は高等学校のみの課題ではないのである。富山県が教育に関していかなる考え方を持っているかが問われているのである。

高等学校再編は、対処療法で対応するのではなく、根本療法で対応していくことが求められていて、それが「こどもまんなか社会」を実現していく処方箋となっていくと考える。

「こどもまんなか」を問う⑤

不登校は多いのか

毎年 10 月に文部科学省から発表される不登校の子どもの数が増加していることが報道されます。

不登校の数が確かに増加はしており、昨年より増加したとか過去最多とか報道されますが、それはあくまで比較しているだけのことではないでしょうか。

現在の学校や家庭、社会の状況からすると、今の数は多いのでしょうか、それともまだ少ないのかもしれません。

不登校が多いから、不登校特例校や学校内フリースクールを作るのではなく、多様化するこどもたちに対応するために、整備するのではないでしょうか。だから、不登校特例校は、今は多様な学び学校と呼ばれるようになりました。

本来の趣旨は、こどもたちの意志を尊重して、彼らが持つ権利が守られて、最善の利益が保障されるために相応しい環境を整えるということだと考えます。

「こどもまんなか」を問う⑥

フリースクールでの学び

フリースクールは、学校外の教育施設として、安全安心な居場所並びに多様な学びの実践拠点である。また、子どもたちの権利擁護と意志尊重を第一としている、まさしく「こどもまんなか」そのものである。こどもに委ねられることを、大人が勝手に決めないことが大切だと考える。

子どもの権利という概念の先駆者であるコルチャック氏が訴えた「子どもはすでに人間である」ということを根底に、自由でわくにはまらない環境を作り、新しい学びの場を提示している。

学校に行けないことをネガティブにとらえる時代はもう終わった。彼らは明るく心豊かな感性に満ちたこどもたちであり、私は誇りに思っている。

多様な学びとは、こどもたちのすべてを受け入れることで個々の可能性が自由に表出されていくことであり、こどもたち同士が自ら育つ意志を共に一緒に育み合うことである。

これからのフリースクールは、当事者から社会的な理解への広がりが課題だと考える。

「こどもまんなか」を問う⑦

不登校は問題行動ではない

2016 年は不登校にとって歴史的な一年だった。その年の 12 月に教育機会確保法が制定され、第 13 条で「休養の必要性」が認められた。また 9 月には文部科学省は「不登校を問題行動と判断してはならない」いう通知を出した。

不登校が問題行動ではないのであれば、増加したとか、減さなければならないという議論は全く意味のないものである。辛い時に休むことは当たり前のことであり、そんな中を無理に行かせたり、またいじめが横行し、生命の危険があるところに行かせること自体が問題であると考える。

不登校状態の子どもが増加しても問題ではなく、そうならざるを得ない環境こそが問題である。自殺対策で、不登校を減さなければならないという意見は論点をすり替えているとしか考えられない。

ある学校に行っていない子どもが、不登校、不登校と言われることで傷つくと言っていた。もう問題行動ではないので、2016 年から 8 年が経過した今、不登校という言葉は死語にすべきである。

「こどもまんなか」を問う⑧

県内各市町にひきこもり地域支援センター設置を望む

現在 15 歳から 64 歳までで 146 万人のひきこもつている方がいらっしゃるという実態調査を内閣府は発表しています。国はひきこもりに精神疾患領域だけでなく幅広い領域での支援体制を整えようとしています。

8050 問題は喫緊の課題であり、女性のひきこもりの顕在化や若い世代のひきこもりもコロナ以降増加しています。

ここで相談体制の整備を求めます。各地元にひきこもり地域支援センターを設置して相談できる体制を整えて、ややもすると相談に行きづらいひきこもっている方々が相談しやすい環境を作っていくことが必須だと考えています。

ひきこもり状態にある本人やご家族は相談機関に相談するということ自体が、今後の生活に向けた第一歩であり、支援につながった事を労り、最大限の敬意を表して、相談に来た人自身を支援することや相談者が求める具体的な支援等をすぐに実現できない場合であっても、緩やかなつながりや関わりを待ち続ける対応が求められています。

国はひきこもりは社会モデルだと考えるようになりました。ひきこもりを個人の問題ではなく、社会がひきこもりを生み出したということであり、ひきこもりを構成員と受け入れる社会を作っていこうということです。

彼らはやむを得なくひきこもつているのであり、彼らが安心して過ごせる社会を作っていくことがこれからの共生社会の姿だと思います。

そのために各市町にひきこもり地域支援センターを是非設置していただきたく願っています。

「こどもまんなか」を問う⑨

つながる・つながりの原点

　ひきこもりの息子娘を持つ家族はどのようにしていけばいいのか。

　当然まずは息子娘が生きていけるように、または自立できるようにあきらめずに努力しています。そのために親も一緒になって考え勉強して彼らの思いを共有できるようにしていく、相談機関に相談する、家族会に参加してみることも大切だと思います。

　次は、彼らが抱える生きづらさを代わりに相談機関や医療機関に伝えるということだと思います。必要な支援を受けるために。

また、同じ思いをしている方々に自分の経験がお役に立てればと思う方もいらっしゃるわけです。
いつまでこの状況が続くのか不安を感じながら多くの年数が経過しています。
ここで、彼らは子どもの時学校で毎日いじめられ、不登校になり苦しんだ日々を忘れられません。子どもの頃のいじめ体験は本当にどうしようもなく、それが重なって人と会うことに恐れを抱き、家から部屋から出ることができなくなっていきます。また自分を追い込み精神的に苦しくなり、二次症状として病んでしまいます。自分は生きていく価値がない、死んでしまいたいと思うほど苦しんでいきます。生きていく価値がない、死んでしまいたいとびっしり書かれた大学ノートを見たことがあります。それは子どもではあるが、本当に考えに考えて答えが見出せず、もがき苦しんできた実相です。ロープを探し、包丁を探し、薬を探し、ガス管を探し、高いところを探したくなる衝動に負けてしまいそうな正気を保つに限界な心境だったと思います。
トラウマとは圧倒された感覚を持ったときに生ずると言います。まさにそういう状態であっただろうと思います。私たち親も必死に彼らのその思いを軽減するべく時間を惜しんで寄り添ってきました。
この生死の限界に立って来られたのは、一方では今回の震災に遭遇された方々だと思います。
体験したことがない揺れ、自分で制御できない状態、倒壊する家屋、塀、落下する瓦、家の中のものが全て崩れ落ちる様子、土砂崩れ、津波、地割れ、液状化、火事、そんな中で身を守る余裕もないあっという間の残状。
まさしく生死の境界に立ち恐怖に慄いた時間だっただろうと思います。その後の全てを失っての避難生活も動転した心境での日々だったでしょう。
出来事の内容は全く異なりますが、生死の境界に立たされることで、いのちとは、生きることとはなどあらゆることを考えざるを得なかった、いのちの原点に立ちかえる共通する瞬間だったのではないでしょうか。
真実なつながりは、いのちの原点に立ち返った中で見出されるのではないかと考えています。またそのつながりこそ新たな社会の形成の基礎になると思います。いのちを最大限に尊重する社会、ありとあらゆる多様化する人々がつながる原点になるのではないでしょうか。
今まで私たちは家庭、社会、学校を行きづらいものにしてきました。私たちが持つ感覚や価値観は行きづらいものを作る方向にしか向いていなかったと言っても過言ではないと思います。それに気づいてきた人間こそ不登校でありひきこもつている人々であると考えています。彼らは決して間違っているのではなく、間違っているのは私たちの方であると私は思います。現代は自分優先で人のことまで考えない世の中になっています。お互いに配慮する考えがないところから行きづらくなっているのではないでしょうか。
彼らが感じたこと、思ったことは正しかったのです。それを否定してきた故に精神的に病んだり、二次被害に追いやったのが真相ではないかと考えています。

「こどもまんなか」を問う⑩

夏休み明けを迎える君に
生きづらさを抱える君たちに伝えたいことがあります。
あなたが生きづらさを抱えるようになったのは、あなたに原因があるのではなく、あなたを取り巻く社会に問題があるからです。
あなたが考えてきたこと、感じてきたことは間違っていないのです。どうしてそう思うかと言うと、あなたのこころが純粋で汚れていないからです。
たとえば、大人たちあるいは学校や教室はこのままでいいのかと思ったことがあったでしょう。そう考えたあなたは正しかったのです。
あなたが声をあげていける環境になっていないし、あなたの声を受け止める環境になっていないのです。
わたしたち大人はあなたと同じ人間であり、上から目線で見たり注意したりすることはおかしいのです。あなたを守ってくれる人々がかならずいます。あきらめないでください。

「こどもまんなか」を問う⑪

夏休み明けの子どもを思う

夏休みの真っ最中です。暑い日々が続いていることもあり、外で遊ぶ子どもたちの姿を、見かけません。彼らは、どんなことを考えながら、日々を過ごしているのでしょうか。

私は、学校に行けない子どもたちと毎日共に過ごしています。彼らは純粋な心、思いやり、真実を持った、かけがえのない存在です。しかし、周囲は彼らを疎外し、無視し、また彼らの考えを否定し、押しつけていくことを、普通のように思っています。それが、彼らをどれほど傷つけているのか、分かっていません。子どもであっても、人格を持っており、大人と全く変わらないのです。彼らは、心優しいので周囲に配慮してしまいます。大人は、彼らを自由を操れると、勘違いしています。

子どもたちが、自由にありのままで生きていく社会を望みます。子どもを大人が磨くのではなく、大人たちが子どもたちによって磨かれていくのだと思います。

子どもたちを平気で傷つけていく社会には、未来はないように思います。

そのためには、子どもの目線に合うように、冷静な眼差しで、子どもと自分の心を見つめることが必要です。

この文章は、夏休み明けの子どもの自殺がないことを願って、したためました。

「こどもまんなか」を問う⑫

不登校増加の背景

不登校つまり学校に行けない子どもたちが増加し続けている。特に小学生下学年の子どもたちが増えていると言われている。富山県での小学生の不登校は令和 4 年度 856 人で令和元年度の 2 倍となっており、出現率は全国でも 13 位と上位である。

増加の背景には親の選択があると考える。学校はいじめなどがあり危険な環境と思われていること、ついで教員は多忙であり子どもに寄り添うことが困難ではないかと思われているからではないか。

昨今支援学校や特別支援級へ通う子どもが増えている現象が起こっている。このことは何を意味していのか、我が子に適した環境を選択していると言える。

この現象は不登校にも当てはまり、子どもを安全で安心できる環境で学ばせようと学校を選択せずフリースクール等の学校外の環境を選んでいるのだと考える。

「こどもまんなか」を問う⑬

富山県は教育県でしょうか？

我が富山県は教育県といわれていますが、そうでしょうか。

学力調査で全国で上位、大学進学率などを根拠としているのでしょうか。

一方で、学校に行けない子どもたちが小中学校で 1,500 人ほどいることをご存知でしょうか。また高等学校を中退する生徒が年間 500 人ほどいることをご存知でしょうか。

さらに、学校に行けない子どもたちで、代替施設を居場所として利用している子どもたちは 1 割に満たないこともご存知でしょうか。9 割近い子どもたちが安心安全な居場所を利用できていないのです。

富山県では大学進学率が高くても、学校に行けない子どもたちへの支援は十分とは到底言えない現状です。

来年開催の G7 教育相会合では富山県としてどのような情報を発信するのでしょうか。

海外の方が一人一人の意思を尊重し、自立に向けた自由で多様な学びを行っています。

情報を発信する以上に、海外で取り組まれている子どもたちの人権を第一とした教育のあり方を学ぶ機会となることを期待しています。

「こどもまんなか」を問う⑭

こころのリアス化

日本は災害列島と言われています。天災との戦いの歴史であり、津波で陸地が削り取られリアス化しています。こども・若者たちのこころもさまざまな困難に痛めつけられ、否定されて、傷つき続けてすり減っています。それを「こころのリアス化」と呼んでいいと思います。

彼らは自分の考えや意志を持っています。しかしそれらを受け入れられず、反対に人の顔色を見ながら生活をせざるを得ない状況にあります。こころが削り取られているのです。

私たちは彼らの声に心から耳を傾け、文字通り共感する場面を持つことが必須だと思います。

共感とは、あなたの思いは私の思い、私の思いはあなたの思いになることで、そこから安心に満ちた信頼関係が出来上がっていくのだと考えます。

現在の教育や支援のあり方に彼らの思いがどれだけ反映されているのでしょうか。これだけ学校や社会に出て行けないこどもや若者が増えていることを考えると、ますます学校や社会が彼らの思いから離れていってしまっていると言っても過言ではないと思います。

こどもまんなか社会は彼らが主役であり、私たちは脇役という関係を逸脱してはならないのです。

「こどもまんなか」を問う⑮

「フリースクールに通う際の通学定期券発行」

先日、フリースクールに通うこどもたちが交通機関を利用するにあたっての通学定期券の発行を県内交通各社にお願いにあがってきました。

各社とも、とてもご理解をいただき、通学定期券の発行にご配慮いただくことになりました。

今は、学校に行けない場合、教育機会を求めるのに学校外のフリースクールを利用することも選択肢の一つとして考えるようになっています。

現在、県内では約 400 名の小中学生が通っています。このたびの通学定期券発行は彼らが通うに際しての交通費の軽減になると共に、今後フリースクール利用を考えている方にも朗報だと思います。

一人でも多くのこどもたちがフリースクールを利用することで一日を安心して過ごして、いろいろな活動に参加したり、同じ仲間と出会ったりして、楽しい毎日を送っていただきたく考えています。

「こどもまんなか」を問う⑯

高校再編について考える

高校再編は引き続き検討課題である。

一つは実業科が減少していることに危惧している。どうも大学進学に偏っていると考える。高校卒業後の進学だけでなく、就職していく選択肢を準備していくことも考えていただきたい。

また彼らが魅力を感じるコースを柔軟に創設していくことも急がないといけない。今までの発想を超えたＺ世代の考えや思考に沿った方向性を示していただきたい。

二つは中退者が毎年 200 人ほどいる。彼らが中退していく背景を分析することが求められる。高校入学後、何かの理由で教室に入れない状態となり、結局不登校となり、出席日数が不足して 10 月になると進級できないと判断

され、中退していく生徒が後を絶たない。
私は小さいながら通信高校を運営し、彼らの受け入れ先の役割を果たしていきたいと考えている。
この問題は中学校での進路指導において、通信高校を含めた多様な情報提供をすることで、生徒の実態にあった進路先を探すことができ、高校中退という経過を辿る必要がなくなると考える。
高校中退した後、どこにも所属していない状態、つまり非就学・非就業となっている生徒たちの日々が心配である。全くどのような様子なのか、ひきこもっているのか掴めない。
彼らに対する支援体制も合わせて考えていく必要がある。

「こどもまんなか」を問う⑰

こどもアドボケイトを体現
こどもまんなかを実現するために、こどもたちが抱えている生きづらさを理解することが問われています。
例えば、不登校になっているこどもたちの背景をアンケートで調査しても本当の理由を見出せず、「理由なき不登校」とまで言われています。今までは彼らの心のうちを明確に知らない中で、大人目線で判断して対応を考えて来ているだけで、有効な策を講じれない状態であります。
昨年亡くなられた詩人の谷川俊太郎さんはひらがなの詩を多く発表されてきています。それは「こどもの中の大人」あるいは「大人の中のこども」に語りかけていると評されています。
『子どもたちの遺言』にある「生まれたよ　ぼく」には、「ぼくは知っている　ここはどんなにすばらしいところか　だから邪魔しないでください」とうたわれています。
私たち大人は、こどもの中にある大人を見い出すことで、彼らと世界を共有することができます。それがこどもアドボケイトにつながり、彼らの生命と権利を守る手立てになるに違いないと思う日々です。

「こどもまんなか」を問う⑱　こどもたちが被る不利益

こどもまんなか社会を実現していくためには、こどもたちが不利益を被っているケースがあれば早急に対処、解決していかないといけない。
その一つは、学校に行けない、要するに「不登校のこどもたち」が被っている不利益である。もともと、学校に行けないこどものことを想定してこなかったのであり、全くと言っていいほど白紙どころか、偏見を含んで白眼視されてきたのである。
怠け児、登校拒否児と言われてきて、いじめ、暴力行為と同列の問題行動とされてきた。50 年近い年月を経過して、2016 年教育機会確保法制定で、漸く不登校は問題行動と判断しないことになった。
しかし、それで全てが解決したわけではない。ここからがスタートであり、50 年の間、いじめ被害に遭い人権侵害を受けて、いまだにトラウマに苦しんでいるたくさんの人々への救済への道筋を、考えていかないといけない。
彼らはいじめ被害により、人生を 180 度変えられてしまい、泣き寝入りを余儀なくされ、今も人知れず苦しい心情を抱えながら、生きているのである。
学校に満足に通えなかった、辞めざるをえなかった、職に就けなかった、対人恐怖になってしまって通院している、結婚できなかったなど被った不利益は、枚挙にいとまがない。
中には、自死を選んだ多くのこどもたちもいる。彼らはその思いを叫んでも聞く耳を持たない社会に対して、返答もないことに失望したに違いない。諦める選択をするのも、納得がいかないのは当然である。

「こどもまんなか」を問う⑲　こども主体の意見表明の保障について

こどもの権利条約第 12 条意見表明権については、こどもが自分自身に関係のあることについて自由に自分の意見を表す権利のことだが、こどもがどのようにして自分の意見を表明できるかが課題である。
フリースクールに通っている小学校のこどもたちもいろいろな経験をして、訴えたいことがあるに違いない。毎日必ず窓際の席に座り、一日中パソコンを見て過ごしている女子など、彼らの心のうちにある生の声を聞いてみたい。しかし、こどもの心の声をくみ取ることは、決して容易ではありません。自分自身で声を上げられないこどもは少なからず存在しており、虐待などの傷を受けている場合はなおさら声を挙げにくい状況にある。
最近こどもの意見を聞いて代弁する「こどもアドボケイト」が児童福祉法改正で導入された。
大人が関わると、ややもすると意見表明支援ではなく意見聴取になってしまいかねない。意見聴取は意見を聴き取るつまりヒアリングで大人主体である。
それに反して意見表明はこども主導であり本質的に異なることを理解する必要がある。

「こどもまんなか」を問う⑳

特定非営利活動法人いわゆる NPO 法人を運営している。困っていらっしゃる方々にお役に立ちたいと思ってボランティアとしてスタートした活動が、次第に輪が広がり、さらなる社会貢献を目指して NPO 法人化していくケースが多い。

制度化された福祉サービス事業を運営しているが、本来は制度化されていない、例えば制度の狭間の部分を対象としていくことが役割だと考える。制度化されセーフティネットが確立している事業ではなく、制度化されていなくセーフティネットが確立されていない部分の支援こそ、ボランティアから発した NPO に求められている。

最近 NPO 法人申請が頭打ち状態であるとともに反対に解散するケースが増えているとも言われている。

社会がますます多様化、複雑化している現代において制度の狭間で、一人で抱え込み苦しんでいる方々が多くいらっしゃると考えられる。そこに NPO 法人が果たす部分があると思うが、資金不足、人材不足、活動目標達成不能、役員欠亡などが背景にあって解散せざるを得ないと言われている。継続していく手立てを官民あげて考えていただきたい。

富山県には現在 393 の NPO 法人があるが、申請は伸び悩み横ばい状態だ。また解散数は 131 となっている。

「こどもまんなか」を問う㉑

フリースクールあるある①
フリースクールに 6 月になって、在籍校の校長や担任の訪問が相続いている。特に 4 月に異動してきた管理職の方々が来られる場合が多い。
「このフリースクールは出席扱いに足る環境なのか」、「スタッフはどういう人がいるのか」、「学習はどうなのか」など見ていく。特に中学校は少し厳しく見ていく傾向があるように思える。
ところで、新任校長はご自分の学校に在籍している児童生徒にフリースクールで初めて対面することになる。お互いに自己紹介している場面は不思議な光景で、毎年行われる恒例行事でもある。こどもたちは頭を下げながら、ちらっと「この人が校長先生か」と見ている。
学校には全く行っていないのに、在籍していることになり、その学校から卒業証書が出されるのはどのように考えても矛盾しているとしか考えられない。最近はフリースクールで卒業証書を出すケースが増えてきている。
中には一回も見にこない学校もあり、自分の学校のこどもであるのに、こんなことでいいのかとも思ってしまう。
昨年度よりフリースクール利用料補助事業が始まり、各学校はフリースクール利用状況を確かめなければならない。そういうこともあり、見に来る校長もいらっしゃるのかと思う。
こどもたちの教育機会の確保の観点から、学校に行けない時は学校外のフリースクールを利用し、元気になれば

また学校に行けばいいのではないか、例えば一週間のうち半分はフリースクール、半分は学校のように壁をなくしていくことができればいいのではないかとも考える。

「こどもまんなか」を問う㉒

富山県こども総合サポートプラザがスタートして 2 ヶ月となる。富山県こども若者総合相談センターも、富山県児童相談所を核に他の 2 機関と共に連携機関として仲間に入っている。
他の機関がいることで心強い。4 月開所当初、家出青年の相談があり、少年サポートセンターとの連携ができ、虐待案件があり児相と連携ができた。
また連休前後は不登校相談が多く、児相と総合教育センター教育相談部との連携での対応が毎日行われていた。
プラザでは、4 機関の連携を密に行うことでワンストップの役割を果たし、さまざまな困難事例にも対応することが成果につながる。また相談件数の推移にも関心を持たれている。4 月より 5 月は増加傾向にあるが、プラザの周知が今後なされることにより更なる増加につながると考えている。そのため PR カードの配布や出張相談会の開催を準備している。
一方私たち、こ若センターは NPO 法人はぁとぴあ 21 が受託して、他の民間機関との連携で成り立っていてスクラムを組んで、こども若者が抱える課題に対応しようとしている。
不登校の子どもたちは学校にはきていない。ひきこもりの若者は社会に出ていない。そのような制度の狭間にいる方々には制度外を守備範囲にして活動している民間機関の役割が大きいと思っている。
私たち民間ならではの切り口である当事者目線を大切にしながら、富山県では今までになかった取り組みとして、公的機関にはない対応策を提案していきたい。

「こどもまんなか」を問う㉓

こどもの中にある大人
良寛さんは、こどもたちと遊んでやっているのではなく、自分がすなわちこどもそのものだったので、こどもたちと一緒になって遊んだと言われている。
宮沢賢治さんは、こどもたちが持つ純粋で素直な眼を通して、大人たちが見過ごしてしまうような世界や自然の美しさ、そして人間同士のつながりが描いている。
昨年亡くなられた谷川俊太郎さんが 50 年前に書かれた「みみをすます」を読んでいる。みみをすましていると、こんなにもいろいろな音が聴こえてくるのかと思わされる。
昨日の雨垂れの音から始まり、人々の足音、蛇のするするする音、死んでいく恐竜のうめき声、プランクトンにまで耳をすます、いったん耳をすまし始めると、どんどんと日常で聞こえなかった音が聴こえてくるようになってくる、それもはるか昔の時代の音まで、それが自分の産ぶ声、お母さんの子守歌、家族のいろんな音、近隣の音まで聴こえてくる。最後は明日の音にまで耳をすましている。
そんな思いで幼いこどもたちの声に耳を傾けてみると彼らの声が聞こえてくるに違いない。谷川さんは、ややもすると気にとめないこどもの声に耳をすまそう、そうすると彼らの思いが聴こえてくると言っていると思う。
私たち大人は、こどもたちが何も言わないので自分なりに判断して、大人目線で、上から目線になり、彼らの意志を無視した言動や行動になっている。
最近、こども基本法が制定されたこともあり各地でこども権利条例が考えられている。こどもが権利主体になり彼らの最善の利益の保障をうたっている。
ここで課題なのは権利の主体であるこどもたちの意志、つまり考えがどこまで反映されているかである。「私たちのことを、私たち抜きに決めないで」（Nothing About Us Without Us）ということにならないかが問われてい

る。
今一度原点であるこどもに帰ることが求められる。その時に谷川俊太郎さんがうたってきたことにつながっていく。
こどもたちの声を尊重することが子ども権利条例の中核となるのであり、こどもアドボケイトが児童福祉法改正で盛り込まれた。こどもアドボケイトと谷川さんの思いは共通するものがあると思いながら読んでいる。

「こどもまんなか」を問う㉔

フリースクールあるある②
フリースクールのこどもたちが「電車で GO」という活動で、時々射水から富山に来ている。あいの風とやま鉄道「越中大門」駅で富山往復切符を購入し、電車に乗って「富山」駅までいき、駅周辺を散策してくるという活動である。
先日は、富山駅北の牛島北公園で遊び、昼食を CIC にあるファミレスでとり、その後 CIC5F にある、富山県こども総合サポートプラザの見学に来た。フリースクールのこどもたち 10 数名と職員 3 名がやってきて、中を見学して、私のいる富山県こども若者総合相談センターの部屋にも入ってきて、プラザのチラシを持って帰っていった。
いつもフリースクールの中だけで活動しているわけではない。買い物やスポーツ、散策で外に出て行く機会が多い。
その時に出会う人たちは、怪訝な顔をして見ていることがよくある。学校に行っている時間なのに、この子たちは何をしているの?という疑問を投げかけている。もう、こどもたちはそのように思われることに慣れている。
職員が「私たちはフリースクールをしていて、この子たちはそこに所属して過ごしている」と説明すると、「はぁ不登校のこどもだね」と変に納得される。
社会に普通にフリースクールがあり、そこで学習したり、日々過ごしているこどもたちがいることを知っていただくいい機会になると考えている。
今回の通学定期券の件も、フリースクールに交通機関を使って通っているこどもたちがいることを知っていただく機会になったと思う。
東京からすると 30 年も遅れた出来事ではあったが、彼らが普通に安心して暮らせる環境をこれからも作っていきたい。

「こどもまんなか」を問う㉕

不登校へ高まる関心
今週は 2 日続きで連続してフリースクールと通信高校が報道された。この現象は増加する不登校のこどもたちへの関心の高まりがあるからだろうか。
報道を見られて感想を伝えてくださる方がいつもより多くいらっしゃる印象はある。
フリースクールに通うこどもたちへの通学定期発行の件は、新聞でも取り上げてくれ、テレビでも報道してくれた。
この通学定期についてはすでに通っている場合の交通費軽減は大きなメリットになることと、今通っていないこどもたちへのニュースになると考えている。
フリースクールはまだ県内には少なく、例えばフレンズは射水市にあるが、実は高岡市からも多く通っている。フリースクールは各市内には一つあるかぐらいだから、最寄りにあり歩いて通える小中学校とは違って自力では通えない。両親が共に働きにいくと、送迎ができないなどの理由でフリースクールに通えないという話は多く聞く。

その事情を緩和する一つの策になるのではないかと思う。
文部科学省が30年前にフリースクールに通う際の通学定期発行を各交通機関に依頼しているのは知っていたが、県内交通各社が対応しているかをお伺いに回った。A 社は全く初耳だと言われ、これは今までにないケースになることが分かった。しかし A 社は対応が早く実習通学定期での対応ができると返答があったのは、やはり不登校のこどもへの便宜をはかろうと考えたのであろう。
この件は、通学定期を使ってまでフリースクールに通っているこどもたちがいることを知っていただくのにいい機会になったと思う。
また 30 年前には東京ではすでに交通機関を使ってフリースクールに通い始めていた。漸く富山でも同じ状況になりつつある。交通事情が都会と富山でははは全く違うので比較はできないが、不登校のこどもに対する支援のあり方が相当遅れているのは間違いない。

次の、高等学校再編と絡めた通信高校をとりあげた報道については、やはり不登校の増加が目立ち社会にも影響を与え、通信高校への関心の高まりに焦点を当てたことによる。
かねてより県内の高等学校中退者が毎年 200～300 人いることをいろいろな場で伝えてきたが関心を持たれなかった印象がある、しかし高等学校再編にはとても大きな課題であり、その現象を踏まえて多様なこどもたちの受け入れができる体制か必要だと考える。
しかし通信高校側からの意見を聞かれることはなく、今回初めて報道が取り上げてくれたことは意義深い。高等学校再編は単に高等学校だけに留まらなく、小中学校も含めた教育全体の再編とつながっていく。再編をやるからには抜本的な改革を断行していく必要がある。
今回、さくら国際高等学校富山キャンパスの生徒たちがインタビューを受けていたが、みんな自分の意見を答えていたのは感動であった。彼らは中学校には行けてなかったが、自分の立場をよく考えている、その結果自分の意志で通信高等学校を選んだのである。
このニュースを見て、真っ先に連絡を下さった方からは「通信高等学校を見下さないで」の発言をよく言ってくれたという内容だった。まだまだ通信高校への理解は低い、中学校での進路指導において通信高校を含めた適切な情報提供がなされていない。中学校不登校のこどもたちに対する親身になった支援体制の整備を願う。